

自由を求め、不自由とたたかう

(令和六年度寄稿) 中頓別町・中頓別中

校長 小林清一

若い頃、生徒会の担当をする」とが多かった。生徒達は、校則「異議を唱え、「自由」がほしいとよく言っていた。「自由」には、「責任」が伴うんだぞ。と理論武装しながら、生徒たちとの折り合いを考えながら、落としろを探るような話し合いをした」とを思い出す。そもそも「自由」という言葉を作ったのは福沢諭吉だつただろうか。聞きかじりでは、「自由」とは「自分をよし」とする」とあり、精神的な決断を表していると覚えていた。

数年前、病に襲われ、右上肢を失った。美術教師であった自分にとって、この出来事は文字通り大きな痛手となつた。だが、その後も管理職として教職を続けられている」とを本当に喜ばしく思う。そうしてまもなく「ゴールにたどりつけうるので、そこは充実感を感じている。

今では稚拙ながら、左手で文字や絵を描けるようになつた。ただ、まだ不満足なことがある。それは学生の頃から趣味で続けてきたギターがうまく弾けない」とである。身体的な「不自由」を「自由」に解放するには、そのハーモンドはとても高い。精神的な「不自由」と身体的な「不自由」では、比べるとはできないかもしれないが、その克服への取り組みはいかなるものであろうか。それぞれが置かれている状況や程度、環境や支援など、さまざまなものによつてその壁は異なるものだと思うが、そへの「たたかい」を求める人は、何らかのかたちで応援したいと思う。

手術を終えて、教育現場に戻つたとき、生徒たちとの対面に当たつては全校集会を開いていただいた。そこで話をさせていただいたのは、確かに「不自由」になつてしまつたかもしれないが、決して自分が「不幸」だとは思つていなかい。今後もあきらめない心を大切に、粘り強く挑戦しながら生きていきたい。と左手で描いた絵を配りながら伝えさせていただいた。

左手でコードを押さえることは出来る。右手にパイプを装着して、手のる位置にピックを接着する。「うする」とで、何とかストロークを弾く」とが出来るようになつた。まだまだギクシャクしているが、小さな「不自由」とのたたかいが始まった。

尾崎豊にボブディラン、ギターを弾いて歌いたい名曲がたくさんある。



小林清一氏がこよなく愛した風景【宗谷校長会会誌の表紙にも掲載】